

奈良県における地域子ども教室推進事業に関する事例研究

吉岡千晶

(向日市立第2向陽小学校)

高橋豪仁・岡澤祥訓

(奈良教育大学保健体育講座)

A Case Study of the Project for Promoting Community Children Class in Nara Prefecture

YOSHIOKA Chiaki

(Muko City Second Koyo Elementary School)

TAKAHASHI Hidesato・OKAZAWA Yoshinori

(Department of Physical Education, Nara University of Education)

要旨：子どもの遊び環境の危機的状況を踏まえ、文部科学省は全国の小学校などで放課後や休日に、地域の大人の協力を得て、「子どもの居場所」を意図的・計画的に作り、家庭、地域、学校が一体となって取り組む「子どもの居場所づくり新プラン」を平成16年に発表し、スポーツや文化活動など多彩な活動が展開される「地域子ども教室推進事業」を開始した。平成17年度、奈良県では地域子ども教室推進事業による36の教室が展開されている。本研究では、その中から吉野町、奈良市、生駒市の3市町（9教室）を事例とし、文部科学省の提示している地域子ども教室推進事業のコンセプトと遊び環境の要素を基に作成した分析枠組みを各事例に当てはめて検討した。それぞれの地域の実情に合わせて事業が展開されており、今後こうした事業をより発展させていくためには、学校・家庭・地域の連携を進めるとともに、その上で必要なコーディネーターの育成が必要であることが分かった。

キーワード：地域子ども教室推進事業 project for promoting local kids school、遊び環境 environment for play、奈良県 Nara Prefecture

1. はじめに

1. 1. 子どもの遊び環境

子どもの成長にとって遊びは、自分の考えを正しく相手に伝えたり、集団の中でうまく人間関係をつくっていく上で不可欠である。また、民生委員・児童委員が実施した全国一斉調査（1998）によると、遊びを楽しみにしている子どもの実際がわかる。「どんなときにうれしかったり、楽しかったりしますか」との問いに対する子ども（小学6年生）の回答で、もっとも多かったのは、「友だちと外で遊んでいるとき」（31.7%）で、3位の「友だちうちの中で遊んでいるとき」と合わせると、44.5%にのぼる。このように、多くの子どもが遊びを通しての友だちとの交流を楽しみにしているのである。

日本では昭和40年頃を中心とした日本の戦後の高度成長に合わせて、大都市を中心に都市化が進行し、これまで子どもが遊んでいた空き地はビルや家屋に変わ

り、道路は自動車に占領され、これまであったスペースがどんどん失われ、遊び「空間」が激減した。昭和30年頃から昭和50年頃までの約20年間に遊び環境は10分の1から20分の1にまで減少した、と全国的な調査をもとに仙田（1983）は報告している。神保ら（1986）は、子どもの望む遊び場の条件として「家から5～10分で行けること」「十分な広さを持つこと」「自然との触れ合いが可能で、本物であること」「偶然・発見・秘密性を持つこと」「たまり場的要素を持つこと」「変化してゆく遊び場であること」「施設の工夫（特に斜面利用について）」の7つの項目をあげているが、子どもたちが思いきり遊べるこのような理想的な遊び「空間」の多くがこの時期に姿を消したといえるだろう。

この第1の変化の20年後、すなわち昭和60年頃を中心とした日本において、第2の変化が起こった。第1の変化が量的な変化が大きいのに対し、この第2の変化は質的な変化である（仙田、1992）。数年後に迫る

受験に備えて、子どもたちは早い時期から学習塾に通い始めたり、ピアノや習字、そろばん塾、スイミングスクールなどのお稽古事に通うといった忙しい日々を送る。これらのお稽古事などによる「時間」の規制がまず1つである。そして、少子化や少人数・一人で出来る遊び、室内で体を動かさずにすむ遊び、高額な遊具を使用している遊びが増加し、多くの「友だち」との遊ぶ機会が減少し、また地域の異年齢・異世代間交流の減少から遊び「方法」が伝承されなくなった。¹⁾ 現代の子どもたちには豊かな遊び環境が与えられているとは言えない。

1. 2. 地域子ども教室推進事業

このような子どもの遊び環境の危機的状況を踏まえ、文部科学省は全国の小学校などで放課後や休日に、地域の大人の協力を得て、「子どもの居場所」を意図的・計画的に作るために、平成16年度より3ヵ年計画で緊急かつ計画的にスポーツや文化活動など多彩な活動が展開される「地域子ども教室推進事業」を開始した。

平成16年度に子どもの居場所づくり新プランとして始まった地域子ども教室推進事業であったが、平成17年度からは地域教育力再生プランの一つとして継続されている。地域教育力再生プランは、社会の構造や環境の変化により、住民の地域社会への帰属意識の希薄などにより、近隣住民間の交流などの不足、青少年の問題行動の深刻化や、青少年を巻き込んだ犯罪の多発など、子どもたちの安全・安心できる遊び場の不足（青少年の異年齢・異世代間交流の減少、青少年の体験活動の不足）、スポーツに親しむ機会の減少、多様な文化体験活動に触れる機会の減少を背景として立案された。それは、地域の教育力の再生を図る多様な機会を提供することを主旨として、地域住民などの様々な活動を通じて住民同士の交流を深め、地域社会の再構築を促し、子どもも大人も生き生きとした豊かで住みよい社会を実現（地域教育力再生）するために国が実施する事業である。地域子ども教室推進事業は、この地域教育力再生プランの中の一つの事業である。

この事業は、家庭、地域、学校が一体となり、スポーツや文化活動など多彩な活動が展開されるよう取組む活動を全国的に実施するものである。平成16年度は、全国約5,000ヶ所で事業を展開し、平成17年度からは週末に地域の専門的知識や技能を有する人材を講師として、より高度で魅力的な学習活動や体験活動を提供する「週末チャレンジ教室」を実施している。主管課は、文部科学省生涯学習政策局生涯学習推進課である。

事業開始年度である平成16年度は7,000百万円である。平成17年度は教室数の拡大に伴い、8,762百万円であり、平成18年度の概算要求額は9,372百万円である。内訳は、

- ①安全管理員等の配置（8,000ヵ所）7,365百万円
 <1年目> 4,000ヵ所×@807千円
 <2年目> 4,000ヵ所×@1,034千円
- ②コーディネーター等の配置（3,007市町村×@315千円）945百万円
- ③週末チャレンジ教室<8,000ヵ所の内、2,000ヵ所>（2,000ヵ所×@226千円）452百万円である。

2. 研究目的と方法

2. 1. 研究目的

奈良県では、地域子ども教室推進事業による36の教室が展開されている²⁾。本研究では、その中から吉野町、奈良市、生駒市の3市町（9教室）を事例として、文部科学省の提示している地域子ども教室推進事業のコンセプトと遊び環境の要素を参考に作成した枠組みに事例を当てはめ、各教室の現状を明らかにすることを目的とする。また、本研究が今後の地域子ども教室推進事業のよりよい展開のための一資料となる事を期待する。

2. 2. 研究方法

奈良県における吉野町、奈良市、生駒市の3市町の地域子ども教室を事例として取り上げ、推進事業関係者へのインタビューや、実際に展開されている教室を調査・観察し、そこで入手した関係書類や資料を用い、その内容を把握する³⁾。分析の方法として、文部科学省の提示している地域子ども教室推進事業のコンセプトと遊び環境の要素を参考に作成した枠組みに、各教室の現状を当てはめ、比較・考察をする。

できる限り条件の異なる地域を取り上げるという意向から、この3市町の教室を事例とした。自然に囲まれ面積が広大な吉野町、奈良県の県庁所在地である奈良市、奈良県で3番目に人口が多く交通のアクセスがよい生駒市と、地域環境の異なる3市町を取り上げた。

地域子ども教室推進事業実施のための手引きを参考に、地域子ども教室のコンセプトをまとめたものが以下の表（表1）である。

表1. 1. 地域子ども教室のコンセプト

要素	構造	コンセプト	
時間	日時	平日の放課後や休日	
	頻度	継続的	
空間	場所	小学校など	
	方法	内容	様々な体験活動
		指導員	地域の大人
友だち	対象	小・中学生	

上のような地域子ども教室推進事業の概要と、遊び環境の要素を組み合わせて枠組みを作成した。枠組みと、型と成否の指標のめやすは以下の通りである。

表1. 2. 分析の枠組み

要素	構造	型	成否
時間	①日時		
	②頻度		
空間	③場所		
	方法	④内容	
		⑤指導員	
友だち	⑥対象		

型

- ①日時【平日】・【土・日・祝日】・【長期休み】
- ②頻度【単発】・【継続】
 (※【継続】：月1回以上の開催で内容が継続している)
- ③場所【学校】・【社会教育施設】・【その他施設】
- ④内容【スポーツ体験活動】・【文化体験活動】・
 【自然体験活動】・【交流活動】
- ⑤指導員【行政関係者】・【教育関係者】・
 【組織・団体関係者】・【その他地域の大人】
- ⑥対象【小学生】・【小・中学生】・【だれでも】

成否

- ①○：【平日】と【土・日・祝日】両開催
 △：【平日】または【土・日・祝日】のみ
 ×：【長期休み】のみ
- ②○：年間を通して週1回以上開催
 △：年間を通して週1回未満開催
 ×：長期休みのみ開催
- ③○：小学校 △：社会教育施設 ×：その他施設
- ④○：複数の体験活動 ×：単数の体験活動
- ⑤○：地域の団体が主体
 △：【行政関係者】がコーディネート
 ×：【行政関係者】が主体
- ⑥○：【小・中学生】を含む △：【小学生】のみ
 ×：【小学生】を含まない

ここで定義している遊び環境の要素は、仙田の定義を参考にした。仙田(1995,p.26)は、「遊び環境は、『時間』、『空間』、『友だち』、『方法』の4要素が相互に影響しあって成立している。」と定義している。同じく仙田(1983, p.92)は、「遊び空間とは『あそび場』と『あそび方法』によって構成された空間である。」と述べているため、本論文では、遊びの要素を「時間」、「空間」、「友だち」の3要素に定義した。また、内容と指導員については、遊びの「方法」の貧困化は、遊びの「内容」を「伝承する者」がいなくなったために招いた現象であるため、構造上「方法」の中に組み込みこととした(仙田,2004)。

成否の指標のめやすは、あくまで文部科学省の提示しているコンセプトと一致しているかどうか、という視点でつけたものである。よって、それぞれの教室の運営の良し悪しを示すものではない。

3. 吉野町における地域子ども教室の事例

3. 1. カンプリア文庫

カンプリア文庫は、地元の幼稚園児のお母さん方が5、6年前から自分たちで絵本の読み聞かせ等の文庫活動をしていた2つの団体が1つになって参画してできた教室である。上市町屋サロンを拠点に、中竜門小学校跡地、国栖幼稚園、吉野町教育研修所で、移動文庫(絵本の貸し出し)、紙芝居、絵本の読み聞かせ、工作、自然観察活動などを行っている。

また、中庄研修会館ではきらきら文庫が絵本の貸し出しや紙芝居、絵本の読み聞かせを行っている。きらきら文庫は中庄小学校区内だけで活動している団体で、カンプリア文庫と時々行事時に合同で教室を開催することもあるが、通常の活動は別々である。

カンプリア文庫は、町内4ヶ所での移動文庫の開館、及び「本はともだちカード」の実施により、本の貸し出し数が飛躍的に増加した。今後は「本はともだちカード」とともに、それぞれの開館場所での個性を出しながら、例えば、子ども同士の本の紹介コーナーを作ったり、地域の昔話や定期的なお話会開催など、子どもたちと絵本の楽しい出会いの機会をより充実していきたいと考えているようだ。また、指導者のほとんどが女性であるため、男性の参加と新たな指導者の確保が課題となるだろう。

表2 カンプリア文庫(きらきら文庫)

要素	構造	型	成否	
時間	日時①	平日 土・日・祝日	○	
	頻度②	継続	○	
空間	場所③	社会教育施設	△	
	方法	内容④	文化体験活動 自然体験活動	○
		指導員⑤	組織・団体関係者	○
友だち	対象⑥	小・中学生	○	

表3 軒先あそび支援センター

要素	構造	型	成否	
時間	日時①	平日 土・日・祝日	○	
	頻度②	継続	○	
空間	場所③	社会教育施設	△	
	方法	内容④	スポーツ体験活動 文化体験活動	○
		指導員⑤	行政関係者	×
友だち	対象⑥	小・中学生	○	

3. 2. 軒先あそび支援センター

軒先あそび支援センターは、幼稚園の跡地である吉野町教育研修所を利用している。1階は事務所等で2階にパソコンが30台設置してあり、パソコンは子どもに限らず誰でも利用可能である。外には小さなグラウンドがありボールやフリスビーなどで遊ぶこともできる。近くには川や山もあり、自然観察をする環境も整っている。

教室の入り口には住所と名前を記入する名簿が置いてある。2階の部屋にはパソコンの他にもスペースがあり、本を読んだり、ものづくりをしたり、カードゲームやボードゲームなどができる。パソコンでもゲームはできるが一人でやってしまうので、気持ちを他の子に向けさせるためにも使用の時間があまり長くないように指導をしているようだ。

吉野町教育研修所は町施設のため、町の職員、又は吉野町子どもの居場所づくり実行委員会の関係者の方が主に指導者として随時2名配置されている。よって、施設の維持管理費用も町で負担している。今後の課題として、地域子ども教室推進事業が終了して国からの補助金が下りなくなった時を想定すると、地域住民や退職教員、ボランティアなどの参加者を今年度または来年度の内に巻き込みながら、将来は利用者らによって運営できる体制を確保していくことが求められる。

表4 こどもスポーツ体験教室

要素	構造	型	成否	
時間	日時①	平日 土・日・祝日	○	
	頻度②	継続	○	
空間	場所③	社会教育施設	△	
	方法	内容④	スポーツ体験活動	△
		指導員⑤	組織・団体関係者	○
友だち	対象⑥	小・中学生	○	

表5 のらキッズ

要素	構造	型	成否	
時間	日時①	土・日・祝日	△	
	頻度②	継続	△	
空間	場所③	社会教育施設	△	
	方法	内容④	スポーツ体験活動 文化体験活動	○
		指導員⑤	組織・団体関係者	○
友だち	対象⑥	小・中学生	○	

3. 3. こどもスポーツ体験教室

こどもスポーツ体験教室は、平成15年8月に設立した吉野スポーツクラブ（YSC）が参画してできた教室

である。これまでは大人対象の教室が多かった吉野スポーツクラブが、子ども対象の教室も開催したいということで、子どもがバレーボール、テニス、野球、フットサル、スポーツチャンバラなど様々なスポーツを体験できるような内容を展開している。教室の実施曜日と時間が週末の夜であるのは、吉野スポーツクラブの他の教室との兼ね合いもあるようだ。参加者の保険加入は今年度から呼びかけられ、指導者の保険加入はされているが参加者の保険加入は吉野町の4教室でもここだけである。今後、子どもたちの多様なニーズに対応するために、指導・体験できる種目を増設する必要がある。そのためには、ボールや器具等の充実を図り、体験の機会を拡大していくと共に、指導者の充実も必要であるだろう。

3. 4. のらキッズ

のらキッズは、不登校や自閉症の生徒を対象とした民間の寄宿型フリースクールNORAのボランティアの活動の一環で、フリースクールNORAの指導員が中心的に指導している。年々拡大していくNORAの敷地3haの中には、母屋、宿泊棟、勉強棟などが並び、山羊、鶏、犬などの動物と生活している。

のらキッズの活動内容は、植物・昆虫観察など自然とのふれあい、石ころアート、木工工作、シャボン玉づくり、ダンボール工作、餅つき、アートバルーン、お絵かき、お菓子作り、サッカー、かくれんぼ、Sけんなど小学校跡地を有効に使った多種多様な活動がされている。参加者の子どものみならず、フリースクールNORAの生徒にとっても地域の人々との交流を通して、考える力や生きる力の育成がなされているのが、地域への定着と地域の人々との交流を最重要視しているフリースクールNORAの運営形態からも読み取れる。教室周辺地域の人々が徐々に参加してくれているとのことなので、今後は継続的に教室を開催するとともに、指導者やボランティアとして参加してもらえるように誘導し、指導者の確保を図っていく。また、地域の文化的・伝統的特徴を取り入れた教室の活動内容も今後検討していきたいと考えているようだ。

4. 奈良市における地域子ども教室の事例

4. 1. 子ども・いきいき・サタデースクール

子ども・いきいき・サタデースクールは、平成14年度から始まった完全学校週5日制をきっかけに、富雄南中学校校区に設立された教室である。運営主体や指導者は、退職教員の方を中心とした地域の大人や地域の関係諸団体を会員とした、子ども・いきいき・ならネットワーク委員会である。参加は登録制で、現在の登録者は約80人である。教室として利用しているのは奈良市西部公民館学園大和分館の2階で、隣接している

公園で教室が終わった後にも遊ぶ子どもの姿が見られる。子ども達は教室に来たら自分の名札を付け、出欠表に丸をつける。子どもの送迎には保護者も協力的で、それは子ども・いきいき・ならネットワークの方々の細かな呼びかけやプリントで、家庭と教室をつなげているからだだろう。教室の参加者は、小学校低学年から高学年まで幅広い。このような異年齢間の交流を通して、自閉症気味であった子どもも、子ども同士や大人とのコミュニケーションの力を身につけていく姿も見られるようだ。今後の課題としては、指導員に高齢の方が多いため、教室を巣立っていった子ども達をサポートとして迎え入れ、中学生のリーダーシップの発揮の場としていくことも考えているようだ。

表6 子ども・いきいき・サタデースクール

要素	構造	型	成否	
時間	日時①	土・日・祝日	△	
	頻度②	継続	△	
空間	場所③	社会教育施設	△	
	方法	内容④	スポーツ体験活動 文化体験活動 自然体験活動	○
		指導員⑤	組織・団体関係者	○
友だち	対象⑥	小・中学生	○	

表7 紙飛行機・鳥凧教室

要素	構造	型	成否	
時間	日時①	土・日・祝日	△	
	頻度②	継続	△	
空間	場所③	社会教育施設	△	
	方法	内容④	文化体験活動	△
		指導員⑤	行政関係者	×
友だち	対象⑥	小学生	△	

4. 2. 紙飛行機・鳥凧教室教室

紙飛行機・鳥凧教室の教室として利用している青少年児童館は、奈良市が運営している施設である。奈良市の職員が講師をしており、青少年児童会館の方から毎回の教室で2名補助としてついている。これまでも児童会館の取り組みとして市から予算をもらい、教室を開催していた。今年度も習字、英語、絵画、リズム体操、歴史などの教室を開催している。保険は年間350円でどの教室にも共通して適用できる。紙飛行機・鳥凧教室の参加者は毎回10人前後で、子どもがなかなか集まらないのが問題である。広報としては、奈良市民だよりや近隣の小学校を通して宣伝しているが、まだまだ認知度も低いように考えられる。来年度からは、また紙飛行機・鳥凧教室とは違う内容の教室開催を予定している。事業終了後の教室開催について

は、青少年児童会館自体の運営が市から民間委託の運営になる可能性があり、まだ明確な用途は立っていない。しかし、青少年児童会館が青少年健全育成や仲間作りの拠点であることは変わらないので、運営の形は変わっても、何らかの形で教室は継続していく予定である。

表8 くろかみやま自然教室（チャレンジ教室）

要素	構造	型	成否	
時間	日時①	土・日・祝日	△	
	頻度②	単発	△	
空間	場所③	社会教育施設	△	
	方法	内容④	自然体験活動	△
		指導員⑤	組織・団体関係者	○
友だち	対象⑥	小学生	△	

4. 3. くろかみやま自然教室

くろかみやま自然教室（チャレンジ教室）は、平成17年度から実施されている週末チャレンジ教室の1つである。くろかみやま自然塾は、奈良市黒髪山キャンプフィールド運営協議会が教室を運営しているが、その構成員はボーイスカウトわかき地区協議会である。市からキャンプフィールドを委託運営されており、自然塾は平成15年度から開催されていて今年度で3年目となる。ボーイスカウトの指導者の高い専門性を生かした、自然の中での工作、料理、ゲームなど内容の濃い教室が毎月1回展開されている。参加費用は毎回800円であるが、昨年度の2,000円から大幅に値下げされ、参加者が急増したようだ。安全対策としては、奈良市黒髪山キャンプフィールド運営協議会が加入している傷害保険を適用している。今後、黒髪山キャンプフィールドが持つ自然を十分に活用して、都市部ではなかなかできない自然体験を子どもたちがこの教室を通してできるように、自然塾が継続していくことを期待する。

5. 生駒市における地域子ども教室の事例

5. 1. いこまっこ教室

いこまっこ教室は、時期と場所を変えて2期に分けて開催されている。その中の1つである夏休みいこまっこ教室は、生駒市の中央部に位置する中央公民館を利用している。中央公民館は生駒市民が利用するにあたって、比較的交通の便がよく利用しやすい。また、夏休みいこまっこ教室は名前の通り、夏休みだけの開催であり、その長期休みという特性を生かし、参加者は事前に申し込みをし、全4回の教室の連続出席を原則としている。教室の内容は回ごとに変わり、スポーツ、工作、料理、異世代交流などが行われている。指

導者も回ごとに交代し、様々な体験をより専門的な指導者から指導してもらえらる。参加費は全4回分で300円(材料代、保険料)である。参加者は生駒市の各地から参加している。これは、夏休みということで親の送迎の協力を得ることができたからであると考えられる。この中央公民館を夏休みだけの利用に限定せず、通常の期間の利用も必要であるだろう。

土曜日いこまっこ教室は、いこまっこ教室の中の1つで、毎月1回第3土曜日に開催されている。教室の内容は回ごとに変わり、スポーツ、工作、料理などが行われている。また、指導者も回ごとに交代し、様々な体験をより専門的な指導者から指導してもらえらる。場所は生駒市の南部に位置する南部コミュニティーセンターせせらぎを利用しているため、参加者は南部からの参加が多いが、土曜日開催ということもあって、保護者の送迎の協力が得られた南部以外の子どもの参加も見られる。また、住宅地も多く子どもが自力で通える環境である。しかし、このような環境であるにも関わらず十分な参加者が得られないのが現状である。次に述べる“宙”のあそび場 Don Donでは子ども舎“宙”による根強い活動の影響もあってそれなりの参加者を得ているが、この土曜日いこまっこ教室では、周辺地域への呼びかけや学校を通しての広報など、まだまだ継続した広い広報活動が必要であるだろう。

表9 いこまっこ教室(夏休みいこまっこ教室)

要素	構造	型	成否	
時間	日時①	長期休み	×	
	頻度②	単発	×	
空間	場所③	社会教育施設	△	
	方法	内容④	スポーツ体験活動 文化体験活動	○
		指導員⑤	行政関係者 組織・団体関係者	△
友だち	対象⑥	小学生	△	

表10 いこまっこ教室(土曜日いこまっこ教室)

要素	構造	型	成否	
時間	日時①	土・日・祝日	△	
	頻度②	単発	△	
空間	場所③	社会教育施設	△	
	方法	内容④	スポーツ体験活動 文化体験活動 交流活動	○
		指導員⑤	行政関係者 組織・団体関係者	△
友だち	対象⑥	小学生	△	

5. 2. “宙”のあそび場 Don Don

“宙”のあそび場 Don Donは、地域の団体である

子ども舎“宙”が運営している教室である。1990年に地域文庫として発足した子ども舎“宙”は、乳幼児から大人まで共に育ち合うために、異年齢の子どもの集団づくりと親育てを目的とし、木のおもちゃや絵本に囲まれ、誰もが予約なしで立ち寄れる場として活動を行っている。地域子ども教室推進事業の一環である“宙”のあそび場 Don Don以外にも、乳幼児から中高生のコミュニケーションスペースや人形劇・大型紙芝居などの出前、絵本やおもちゃの貸し出しなどの活動も行っている。参加費は毎回200円である(材料代、参加費)。“宙”のあそび場 Don Donは生駒市の北部に位置する北部コミュニティーセンターISTAはばたきを利用している。生駒市の地域子ども教室の中では唯一対象が小中学生と幅広い。しかし実際の参加者は乳幼児やその保護者も多く、特に制限はしていない。昔の保護者は子どもについて来るといった感覚だったが、今の保護者は自分自身が工作などの経験がなく、子どもと一緒に活動を楽しんだりむしろ保護者の方が積極的に活動を楽しんでいる、という子ども舎“宙”の方のお話が印象的であった。

表11 “宙”のあそび場 Don Don

要素	構造	型	成否	
時間	日時①	土・日・祝日	△	
	頻度②	単発	△	
空間	場所③	社会教育施設	△	
	方法	内容④	文化体験活動 自然体験活動	○
		指導員⑤	組織・団体関係者	○
友だち	対象⑥	小・中学生	○	

6. まとめ

6. 1. 奈良県における地域子ども教室の考察

本研究の目的は、奈良県における地域子ども教室推進事業を事例として、文部科学省の提示している地域子ども教室推進事業のコンセプトと遊び環境の要素を参考に作成した枠組みに事例を当てはめ、各教室の現状を明らかにすることであった。ここで調査をして明らかになったことを以下に述べる。

6. 1. 1. 日時

平日の教室開催は難しく、まだまだ土・日・祝日などの休日開催中心の教室が多い。これは、子どもの平日の放課後の現状が、塾やお稽古事に時間を費やされていて、実際に平日の放課後に教室を開催しても子どもが集まらないという理由があるようだ。しかし、それにも関わらず、吉野町では平日である水曜日や金曜日に開催している教室もある。これは、水曜日であれば学校が早く終わる曜日を狙って教室を開催しているようだ。

このように、学校の授業の終了時間や他の事業との兼ね合いを考慮して、日時を設定する努力が必要であると考えられる。

6. 1. 2. 頻度

地域子ども教室推進事業は、年間で最低60回以上の教室開催を目標としているため、週1回以上の教室開催は実現したい。また、子どもの成長や友だち作りを期待するならば、単発の教室であるよりも継続した教室である方がその効果は望めるであろう。しかし各市町で開催している教室の頻度は月に1～2回の教室が多く、単発のものも少なくはない。前述の日時と同様に、子どものニーズに合わせた頻度になっているようだ。

吉野町では教室によって様々だが、「カンブリア文庫」や「軒先あそび支援センター」では週に2回、吉野町全体としてみても町のどこかで週2～3回は教室が開催されていることになる。これは子どもにとって、「ここに行けば何かある」といった居場所としての認識を持ってもらうために十分な頻度であると考えられる。

また、生駒市では、昨年の1教室から2教室3ヶ所へと拡大し、市全体としては頻度も増加した。「ここに行けば何かある」といった居場所としての認識を子ども達に持たせるためには、生駒市の様に少しずつでも頻度を増やしていく必要があると考えられる。

6. 1. 3. 場所

各市町とも主に社会教育施設を利用し、地域の人々にとって親しみやすい場所を利用している。しかし、小学校を利用した教室は、子どもにとって生活の大半を過ごす最も親しみのある場所であるにも拘らず、3市町の中にはなく、奈良県の全教室を見てもわずかである。奈良市においては、市が独自に平成14年度から奈良市小学校区学校週5日制事業（奈良市小学校区子ども居場所づくり事業）で各小学校区の子どもの居場所づくりを進めているが、これは奈良市が都市部であり、比較的狭い範囲内で1つの小学校区があるという前提があるからである。山間部である吉野町では、子どもの減少により小中学校の統廃合も進み、1つの小学校区は都市部と比較して、大変広範囲となる。中にはスクールバスでの登下校を余儀なくされている子どもも存在し、一度自宅に戻って再び学校に戻って遊ぶことは困難である。

このように、市町村の環境条件によって様々であるが、基本としては子どもが安全に自力で通える場所を設定したい。

6. 1. 4. 内容

子どもは様々な体験活動を通して成長していく。各市町の教室を見てみると、生駒市や吉野町では1つの教室の中で様々な体験活動を行う教室が開催されている。もちろん1つの教室の中で様々な体験活動が行え

るのが理想的な形ではあるが、市町村の中で様々な教室が開催されていて、その中から子どもが選択し、様々な体験活動を行うのもまた1つの形であると考えられる。奈良市では、市が独自に奈良市小学校区学校週5日制事業（奈良市小学校区子ども居場所づくり事業）で各小学校区の子どもの居場所づくりを進めているが、地域子ども教室として開催している「紙飛行機・鳥凧教室」や「くろかみやま自然教室（チャレンジ教室）」は、奈良市全域の子どもを対象に教室を開催している。このように奈良市での地域子ども教室推進事業の取り組みは、市が各小学校区で進めている事業の補完的な役割があると見ることができる。子どもの選択肢が多いのはもちろん良い事ではあるが、子どもの取り合いにならないように、各教室が協力・連携することが重要である。

また、吉野町の「軒先あそび支援センター」の様に、特に毎回の活動内容を設定せず、指導者も子どもの活動を見守るといった様な教室にも注目したい。カイヨワ（1990）は遊びについて、遊びとは自由な活動であり、遊び手が強制されるようなことがあれば、遊びはたちまち魅力的な愉快な楽しみという本性を失ってしまうということや、創意工夫、努力の余地があることで、ある種の自由が必ず遊ぶ人の側に残されていないといけない、ということ述べている。つまり、子どもの遊びというのは、大人の管理化にはない自由な活動であるのが本来の姿なのである。将来的には、このような教室が増えればよいと考える。

6. 1. 5. 指導員

指導員の主な役割としては、活動場所における子どもたちを対象とした活動プログラムの企画・実施や子どもたちの安全確保などが求められている。このように子どもの活動にとって重要な指導員であるが、平成16年度の「事業実施により判明した課題」の集計によると、「人材の確保」が最も課題として挙げられている件数が多かった。指導員として想定される人材は、高齢者、退職教員、大学生、民生委員、保護司、PTA関係者、社会教育団体関係者、青少年団体関係者、スポーツ団体関係者、文化団体関係者、NPO関係者、ボランティア関係者などが挙げられているが、地域の大人であればもちろん誰でも可能なのである。指導員というと、子どもを「指導」しなければならないと考えがちだが、「子どもの活動を温かく見守る人」くらいに捉え、地域の人々が気軽に参加できるような呼びかけが必要であると考えられる。

また、各市町の教室を見てみても若年層の指導者が少ない。地域の高校生をボランティアとして協力を要請したり、また、大学生の専門的な知識を大いに活用することで、地域のコミュニティーも活性化すると考えられる。

6. 1. 6. 対象

子どもの遊び環境が成立する要素として、遊びの方法を伝承できる異年齢間の交流は大変重要である。国のコンセプトとしても、小中学生を対象とした地域子ども教室が望まれており、各市町でも小・中学生を対象としている教室は多い。しかし、各教室とも実際の参加者は小学校の低学年が多いようだ。これは、小・中学生の全学年ともに魅力のある内容を設定できていないからではないだろうか。

年長者が年少者に遊びを教える体制を設定することで、子どもの異年齢間の交流を図れる。そこで中学生を参加対象に限定するのではなく、指導員としての対象にしてみてもどうか。吉野町の「のらキッズ」では、フリースクールNORAの生徒がボランティアの一環として子どもたちと活動をしている。指導といっても、ただ一緒に遊んで楽しむことができればよい。そんなお兄さんお姉さんの存在が今の遊び環境に求められている。

また、参加対象を小・中学生と限定するのではなく、乳幼児も含めた子どもを対象にしてもよいと考える。実際に生駒市の教室では、保護者と一緒であれば乳幼児の参加も認めている。乳幼児も参加対象に含むことで、将来的な子どもの参加者数の増加や、保護者の指導員としての協力も期待できると考えられる。

6. 2. 学校・家庭・地域の連携

奈良県における地域子ども教室の考察として第1節にまとめたが、各市町が地域の特性や子どもの現状を考慮して、少しずつでも子どものためによりよい環境を作りだそうとしている様子がよくわかった。吉野町では、過疎化や少子化が進行していく中、各小学校区での教室開催が難しい状況でありながらも、地域の人材を生かして各地で継続的に教室を開催していた。奈良市では、以前から市が独自で実施していた奈良市小学校区学校週5日制事業（奈良市小学校区子ども居場所づくり事業）が基盤にあり、本事業では、市全体の子どもの対象にした教室が開催されていた。生駒市では、昨年度の課題であった実施場所と対象年齢が共に今年度は拡大し、更なる地域子ども教室の発展が期待できた。

しかし、前節でも述べたように、平日よりも土・日・祝日など休日開催中心の教室が多いことや、学校が教室の場所として提供されていないこと、指導員などの人材不足といったような課題もある。平日の放課後や、学校を利用した教室開催のためには、学校の協力が必要である。また、人材確保のためには、家庭や地域の協力が必要である。これらのことから、学校・家庭・地域のそれぞれに重要な役割があり、この3領域の連携が地域子ども教室において求められているのではないだろうか。1996年7月19日の「21世紀を展

望したわが国の教育の在り方について」第15期中央教育審議会第一次答申「第4章学校・家庭・地域社会の連携」でも、「子どもたちの教育は、単に学校だけでなく、学校・家庭・地域社会が、それぞれ適切な役割分担を果たしつつ、相互に連携して行われることが重要である。」と示されているように、子どもの育成において学校・家庭・地域の連携は不可欠である。

学校・家庭・地域が連携するために、どういう仕掛けやプログラムが必要か考えてみると、子どもの自由時間を保証するためには、家庭の協力が第一に必要である。どんなに優れた教室を開催しても、家庭の理解なくしては、子どもは教室に参加することはできない。家庭に地域子ども教室の趣旨を理解してもらい、家庭は子どもに対して、地域子ども教室に参加を促すと同時に、「地域の大人」としてボランティア登録や協力をして子どもたちを育てていく必要がある。

加えて、学校の協力が必要なのは言うまでもない。教室への参加の呼びかけや地域子ども教室の開催場所の提供はもちろん、それぞれの子どもの共通の自由時間を用意する必要がある。自由時間の共有を阻むのが、通塾とともに宿題などの課題であるだろう。国立教育会館社会教育研修所（1998）の「家庭・学校・地域の連合・融合のすすめ」によると、かつてある自治体が、子どもに週に半日の「子どもの午後」を設置する提案をした。例えば、週のある日に教師は宿題を出さない。親はその午後には子どもの通塾を自粛させ、子どもが外に遊びに出るのを奨励する。その日は、学校のグラウンドの開放だけではなく、企業が所有しているスポーツ施設の提供も取りつける。こうした多角的な取り組みで初めて、たとえ半日でも群れて遊ぶ子どもの姿を見ることができるようだろう。

地域は家庭や学校の補完として、地域の大人たちの教育力を結集して、共に子ども達を育成していかなければならない。地域の中でも特に企業は、施設的にも人的にも豊富な資源を持っている。このような資源をできる限り地域の子どものためにも開放を望みたいものである。また、最近ではボランティア休暇を認める企業が出てくるなど、企業が地域に貢献しようとする姿も見え始めている。このような企業を高く評価することによって、企業が地域に貢献できる意欲を高めるとともに、きっかけを作ることができるであろう。そして、これらの連携を進めるためには、コーディネーターの存在が必要不可欠である。いくら学校・家庭・地域がそれぞれ素晴らしい取り組みをしても、各事業で子どもの取り合いになってしまえば意味を成さない。3領域の連携を進めるためには、それらをまとめる役割が必要であり、それがコーディネーターなのである。コーディネーターの役割として、家庭・学校・地域で定期的な連絡協議会などを設置し運営しながら、相互の意思の疎通を図ったり、また、地

域に埋もれている人材を発掘したりすることが求められる。

本研究で取り上げた吉野町の4教室には2人のコーディネーター、奈良市の3教室には2人のコーディネーター、生駒市の2教室には3人のコーディネーターがそれぞれ配置されており⁴⁾、市町の教育委員会の職員がこれを担当している場合もあった。しかしながら、今回の調査では、必ずしも前述したような家庭・学校・地域による有機的な連携を見出すことはできなかった。奈良県における地域子ども教室推進事業の成果をさらに発展させるためには、学校・家庭・地域の連携が不可欠である。⁵⁾ また平成19年度から、文部科学省の「放課後子ども教室推進事業」と厚生労働省の「放課後児童健全育成事業」が一体化され、総合的な放課後対策事業「放課後子どもプラン」が実施される。これに伴い厚生労働省関連の事業との連携が必要となることから、これまで以上にコーディネーターの果たす役割が大きくなることが予想される。コーディネーターの育成が、こうした地域教育事業を進めていく上での前提となることは言うまでもない。

地域子ども教室推進事業は、平成16年度から始まり平成18年度をもって終了する。事業終了後も地域子ども教室が発展的に継続しなければ、3年に渡る推進事業が無駄なものになってしまう。事業終了後も子ども達の居場所が存在し続けるためには、運営経費の捻出や人材の確保が不可欠である。また、理念的には、子どもも同様に大人も一緒に楽しめる居場所とすることにより、無理なく地域の力でできる範囲で、誰もが楽しめる活動とすることが、事業を継続していくポイントだろう。子どもの遊び環境が悪化している中、このような意図的・計画的な居場所づくりの事業は、地域社会の教育資源を総合的に活用して展開されなくてはならない。

注

1) 仙田(2004)は、「子ども達は遊びを通じて多くのことを学ぶ、遊びは学びである」と述べており、特に遊びを通じて開発する能力を、感性、創造性、身体性、社会性の4つの能力だと考えている。この4つの能力を詳しく見てみると、まず感性とは、美しいと思える心である。仙田(1990)は子どもの頃の住まいや遊び環境そして空間体験と現在の自分の仕事の関係度を調査し、同著でその考察として、特に自然遊びの体験に注目し、「子ども時代に人は遊びを通して美しさを発見し、美しさの感覚を身につけているのではないだろうか」と述べている。自然の中で子どもは様々な動植物に出会い、その無限のフィールドで感性を身につけていくのであろう。創造性は、工夫する力である。

絵を描くことや工作などの創作活動を通して、子どもは想像したりそれを表現する力を身につけることができる。身体性というのは、体力・運動能力といってもよい。外で遊び、走り回ることによって、子どもは走ること、飛ぶこと、登ること、潜ること、泳ぐことにより身体の筋力をはじめ、敏捷性、瞬発力、持久力など、さまざまな能力を身につけていく。そして社会性は、友だちと仲良くなるということである。子どもは遊びを通して人間関係や社会的なルールや責任を学ぶ。このように、子どもは遊びを通して多くのことを学び、身につけることができる。

- 2) 平成17年度の奈良県における、地域子ども教室推進事業実施団体名は以下の通りである。実行委員会名の後のかっこ内の数字は教室数である。(※は平成17年度から参画した実行委員会)
- 奈良市子ども居場所づくり推進委員会 (3) ※
 - 橿原市地域子ども教室推進実行委員会 (3)
 - 生駒市地域子ども教室推進実行委員会 (2)
 - 當麻子どもの居場所づくり運営協議会(葛城市) (3)
 - 三宅町子ども教室運営協議会 (3)
 - 榛原子ども教室実行委員会(榛原町) (3) ※
 - 子ども教室推進事業実行委員会(曾爾村) (1)
 - たかとりっこ夢くらぶ(高取町) (1)
 - 王寺・菩提子どもの居場所づくり運営協議会 (2) ※
 - 吉野町子どもの居場所づくり実行委員会 (4)
 - 天川やまびこクラブ実行委員会 (1) ※
 - 「ふるさと再発見」実行委員会(下北山村) (1)
 - 奈良県PTA協議会(PTA) (9) 以上、全36教室
- 3) 奈良県の地域子ども教室推進事業については、2005年2月21日(月)・9月14日(水)・12月2日(金)の3回にわたって奈良県教育委員会事務局生涯学習課を訪問し、担当者に事業の概要を伺い関連資料を頂いた。吉野町の事業展開については、2005年4月20日(水)に吉野町教育委員会生涯学習課を訪問し担当職員の方から概要を伺い関連資料を頂いた。また、カンブリア文庫(きらきら文庫)には2005年11月2日(水)・11月12日(土)・11月26日(土)、軒先あそび支援センターには2005年11月2日(水)・11月12日(土)、こどもスポーツ体験教室には2005年11月2日(水)、のらキッズには2005年11月26日(土)にそれぞれ訪問し、活動を観察した。奈良市の事業展開については、2005年9月20日(火)に奈良市教育委員会事務局社会教育課を訪問し、担当職員の方から概要を伺い関連資料を頂いた。また、子ども・いきいき・サタデースクールには2005年12月24日(土)、紙飛行機・鳥凧教室には2005年12月17日(土)、くろかみやま自然教室(チャレンジ教室)には2005年11月27日(日)にそれぞれ訪問し、活

動を観察し担当者にお話を伺った。生駒市の事業展開については、2005年10月27日（木）に生駒市教育委員会事務局女性青少年課を訪問し、担当職員の方から概要を伺った。また、いこまっこ教室には2005年12月3日（土）、「宙」のあそび場 Don Donには2005年11月5日（土）にそれぞれ訪問し、活動を観察するとともに担当者にお話を伺った。

- 4) 平成17年度 奈良県子どもの居場所づくり運営協議会の資料より。
- 5) 本研究において用いた分析枠組みは、各教室の現状を把握するためのものであったためにコーディネーターに関する項目を入れることはしなかったが、この分析枠組みによってそれぞれの教室の事業展開を比較検討することを通して、コーディネーターの重要性を指摘することができたと考える。

文献

- ・カイヨワ（1990）遊びと人間.講談社学術文庫
- ・国立教育会館社会教育研修所（1998）家庭・学校・地域の連合・融合のすすめ.ぎょうせい.
- ・新保信一、深沢紀子（1986）子供の遊び場についての研究（Ⅱ）－過密都市における児童公園の検討－.明治学院論叢237号
- ・全国民生委員児童委員連合会・全国社会福祉協議会（1998）濟世顧問制度創設80周年記念事業、民生委員・児童委員による全国一斉「子ども子育てに関するモニター調査報告書」.
- ・仙田満（1983）都市化によるあそび空間の変化の研究.都市計画126. pp. 87-92.
- ・仙田満（1990）こどもと住まい：50人の建築家の原風景.住まいの図書館出版局.
- ・仙田満（1992）子どものあそび.岩波新書.
- ・仙田満（1995）学校を子どものあそび場に.体育科教育:43巻8号. pp. 26-29.
- ・仙田満（2004）こどもの生育環境とこどもの環境学の確立に向けて.保健の科学. pp. 642-655.
- ・中央教育審議会（1996）21世紀を展望したわが国の教育の在り方について（答申）.
- ・文部科学省ホームページ<http://www.mext.go.jp/>
- ・文部科学省生涯学習政策局子どもの居場所づくり推進室（2004）子どもの居場所づくり地域子ども教室推進事業実施のための手引き.